

月刊

2020

7  
月号

# みんぱく

特集

広がる  
写真データベース



写真データベースの学術的価値 飯田卓 / データベースが生み出す多様な視座 端信行  
食と農の未来 池谷和信 / 海と生きる人びとの生活と独立期のパプアニューギニア 丹羽典生

# スマホが激変させた 地域文化

内戦下の南スーダンを二〇一二年に訪れたときのこと。電気も通じていない藁葺きの家々がサバンの一点在する、ほとんど人気もない荒廃した村の一軒屋で、ホンダの小型蓄電機が稼働し、おびただしい数の携帯電話が繋がれ充電されている光景に出会い、目を見張った。通信網を確保するアンテナが何十キロメートルおきかに設置されていて、電波が届くその周辺でのみかろうじて通話が可能というひどい通信状況にもかかわらず、しかも現金収入など皆無に近いはずの極貧の村人たちのあいだに、携帯電話がこれほどにも普及していることに驚愕したことがあった。

先進国であれ途上国であれ、携帯電話によって世界が一変したことは言うまでもないが、そもそも電話など触ったこともなく、通信という発想すらなかったであろう、最辺境の住人に与えた携帯電話のインパクトは想像を絶するものがある。

約半世紀にわたって、地球上の辺境に息づく地域文化を撮影してきた。見知らぬ民族文化に刺激されシャッターを切ってきたが、近年になり何処に行ってもほぼ観てしまった光景であると感じるようになり、とくにこの一〇年ほど、その傾向が

## 野町 和嘉

プロフィール  
1946年高知県生まれ。写真家。杵島隆に師事した後、1971年にフリー。サハラ砂漠、ナイル川流域、エチオピア、チベット、サウジアラビア等での長期の取材を続ける。写真集に『サハラ』（平凡社）、『ナイル』（情報センター出版局）、『メッカ巡礼』（集英社）ほか。ローマ、ミラノ、東京ほかで大規模な写真展「聖地巡礼」を開催。土門拳賞、芸術選奨文部大臣新人賞、日本写真協会国際賞など受賞。2009年、紫綬褒章を受章。

顕著になった。無理もない、スマホの普及によって世界中でほぼ同一の情報共有するようになってしまったわけであるから。情報の質や深さに違いはあるにしても、その思考パターンの回路に大差は無くなってしまったのである。

標高四〇〇〇メートルの極限高地に二万人近い僧尼が暮らす、東チベットのラルンガル僧院を二〇一四年に訪れた折にも、僧尼の間にスマートフォンがものすごい勢いで普及している様に、チベットよ、お前もかと溜め息をついたことがあった。こちらはIT大国中国の領域であるから南スーダンとは比較にならない。僧院ではテレビの持ち込みは以前から禁じられていたが、スマホは規制がなかった。尼さんとチャットに熱中している僧もいるとこのことだったし、スマホ中毒で生気のない、疲れ眼の少年僧もいた。ひと昔前までチベットの修行僧たちが発していた底知れぬオーラが影を潜めてしまったことが、ファインダーを通じて向き合ったその面構えからも見て取れるのだった。

思えば、最後のよき時代に地域文化の原形にかろうじて触れることができた、しみじみ感じるのである。

## 月刊 みんな

7月号目次

- |  |  |
|--|--|
| <p>1 エッセイ 千字文<br/>スマホが激変させた地域文化<br/>野町 和嘉</p> <p>2 特集 拡がる写真データベース<br/>写真データベースの学術的価値<br/>飯田 卓</p> <p>4 データベースが生み出す多様な視座<br/>——「アフリカ カメルーン民族誌写真集」の試みから<br/>端 信行</p> <p>6 食と農の未来<br/>——佐々木高明の見た最後の焼畑<br/>池谷 和信</p> <p>8 海と生きる人びとの生活と独立期のバブアニューギニア<br/>——大島襄二写真コレクション<br/>丹羽 典生</p> <p>10 ○○してみました世界のフィールド<br/>異文化の音楽をまなぶ<br/>福岡 正太</p> | <p>12 みんなく Information</p> <p>14 世界のバスケットリー×バスケットリーの世界<br/>籠をあまり使わない社会<br/>金谷 美和</p> <p>16 みんなく回遊<br/>展示場で散歩する<br/>今村 宏之</p> <p>18 シネ倶楽部 M<br/>チベットのリアル<br/>——「巡礼の約束」<br/>棚瀬 慈郎</p> <p>20 ことばの迷い道<br/>外国人は目が白い？<br/>古川 不可知</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|--|--|

# 広がる 写真データベース

デジタル化が進み、情報が世界規模で拡散する今日、写真もまたさまざまな形で使用されている。閲覧から学術利用まで、多岐にわたり利用されることを願い、本館でも写真データベースを制作・公開している。そのなかから最新のものを三件紹介し、写真データベースのあり方について考える。

## 写真データベースの 学術的価値

飯田卓 民博人類文明誌研究部

本特集では、民博がホームページで公開している写真データベースを紹介するのは、後に続く三つの論稿で紹介するのは、佐々木高明や大島襄二、端信行といった名だたるフィールドワーカーが撮影した写真と、それをもとに構築したデータベースである。これらの写真は、過去の習俗や出来事の貴重な記録であり、間違いなく学術的に高い価値をもつ。しかし、そもそも学術的に価値の高い写真とは何だろうか。さらに、それらをデータベースとして公開することには、どのような意義があるのだろうか。

写真を読みとく  
結論からいうと、多数の写真をしかる

べきテーマや時間軸に沿って配列すると、一点一点の写真ではわからない情報が伝わりやすく、学術的価値が高まる。例えば、まったく同じ構図の二枚の写真があるとする。似たような景観のなかに似たような人物が写っているが、いっぽうは人物に焦点が当たっていて景観から場所を特定できず、他方は景観に焦点が当たっていて人物を特定できない。そうした場合、二枚の写真は同じ場所で同じ人物を写したものだという推測が生まれ、特定の人物が特定の場所にいたこと、かなりの確からしさで断言できるようになる。このように、撮影の日時や場所、意図などが後からわかるかたちで分類されたり配列されたりすれば、写真を「読みとく」ことができる。こうした「読

みとき」ができなければ、いかにめずらしいものが写っていても、学術活動には結びつきにくい。

また、写真の分類や配列がはっきりしていないくても、何を写したかを示す信頼性の高い文字情報を後から加えれば、学術的価値はいつそう高まる。文字情報の付加自体が「読みとき」の結果だが、それをふまえると、他の写真との比較や文献調査によって、「読みとき」はさらに深まる。写真の学術的価値は、利用されればされるほど高まるといつてよいかもしれない。

### データベースとインターネット

民博が公開している写真データベースの多くは、前述のように撮影のコンテクストをあるていど維持しており、その後



X0002644, X0002646 (熊本県五木村、1960年)



左からX0328633、X0328632 (バブアニューギニア、1976年)、X0071738、X0071743 (カメルーン、1994年)

## 写真データベース一覧

本館の写真データベースは、おもに「映像・音響資料」と、フィールドノートや日記など、写真以外の資料も含む「民族学研究アーカイブズ資料」の一部として公開している  
URL <http://htq.minpaku.ac.jp/menu/database.html>

### 映像・音響資料 (ホームページ上で写真の閲覧が可能)

#### ネパール写真

西北ネパール学術探検隊 (1958年) に参加した高山龍三 (元京都文科大学教授) らがネパールで撮影した写真と、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の写真およびその情報

#### 京都大学学術調査隊写真コレクション

「京都大学アフリカ学術調査隊」(1961～1967年)、「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」(1969年)、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」(1960年) が撮影した写真

#### 沖守弘インド写真

写真家・沖守弘が1977年から1996年までインド各地やネパールで撮影した祭礼、芸能、工芸や人びとの暮らしなどに関する写真

#### アフリカ カメルーン民族誌写真集——端信行コレクション

端信行 (本館名誉教授) の、おもにアフリカ・カメルーン共和国における、1969年から90年代のはじめにかけての、数度にわたる民族学的調査の過程で撮影された写真

#### 西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料

##### ——大島襄二写真コレクション

大島襄二 (元帝塚山学院大学教授) が、1967年から1991年にかけてアジアや大洋州などを調査したときの記録写真の一部

#### 焼畑の世界——佐々木高明のまなざし

佐々木高明 (本館第2代館長) が調査で撮影・記録した写真のうち、特に日本の焼畑に関する写真

### 服装・身装文化資料 (ホームページ上で写真の閲覧が可能)

#### 衣服・アクセサリ

本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリ標本資料の詳細分析情報。関連するフィールド写真として、「マヤの衣文化」「ネパールの衣文化」および「ベトナムの衣文化」を公開

### 民族学研究アーカイブズ資料

(ホームページ上では目録のみ公開、写真の閲覧は不可)

#### 岩本公夫アーカイブ

岩本公夫が1990年代後半、北京語言文化大学に留学していたときに撮影した「門墩 (北京の伝統的な住宅の正門前に置かれた石材)」の写真等

#### 梅棹忠夫アーカイブズ

梅棹忠夫 (本館初代館長) が残した文書資料と、1940年代から1980年代に世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真「梅棹忠夫写真コレクション」

#### 大内青琥アーカイブ

画家・大内青琥旧蔵の、ヤップ島から小笠原までを航海したカヌー「バサウ号」の建造および航海に関わる紙資料と写真

#### 小林保祥——台湾南部原住民族アーカイブ

小林保祥によって撮影された1918年から1935年までの台湾原住民族の記録写真および関連する原稿等の文書資料

の考証も研究所所属の監修者によって進められている。表にはその代表例をあげた。ここに掲げているのは、ホームページで公開しているものばかりではない。事前申請をして民博館内で閲覧しなければならぬものも含まれる。これらをホームページで公開しないのは、学術的価値がないからではない。インターネットで公開すると誰の目にとまるか予測できないため、写真の公開が特定の人物に不利益をもたらすことのないよう、撮影状況をふまえながら時間をかけて検討しているのである。

民博が保管するアーカイブズ資料は、ほぼすべてが近現代に形成されたため、古文書のアーカイブズなどとは異なった基準で運営せざるをえない。したがって表には、古文書のような参照資料として写真を位置づけるようなデータベースも含めていない。例えば、「身装画像データベース」(近代日本の身装文化)のよう雑誌掲載の写真を多く含むデータベースは、インターネットでアクセスできても他の写真データベースとは性格が異なっている。

本特集では、コレクションの「読みとき」にかかわった研究者の証言とおして、写真資料の価値に目を向けなおしていただきたい。

# データベースが生み出す多様な視座 ——「アフリカカメルーン民族誌写真集」の試みから

はたのぶゆき 民博名誉教授

ミニ・アフリカあるいはアフリカの縮図

カメルーンを初めて訪れたのは一九六九年のことであった。この年はEXPO'70すなわち大阪万博を翌年にひかえ、前年の六八年に組織された日本万国博覧会世界民族資料調査収集団が文字どおり世界中に調査員を派遣し、のちに民博の所蔵資料となる各地の民族資料の調査と収集にあたっていた。

アフリカではカメルーンが収集地のひとつであった。それは、アフリカ大陸のほぼ中央に位置するこの国が、ミニ・アフリカとかアフリカの縮図といわれ、アフリカの諸民族文化を集積している地域であるからだ。南北にはそながい三角形の国土をもつカメルーンは、面積は日本の一・三倍ほどであるが、南端は北緯二

度で赤道直下にあり、北端は北緯一三度でサハラの子ヤド湖に至る。南北をへだてる中央部には標高一〇〇メートル前後の高地帯が東西に走り、サバンナ疎林の植生が広がる。北へ向かうとサバンナからステップそして砂漠へと変わり、南部は南に向かうほど熱帯林が深くなる。こうした自然環境を背景に、大陸の東西南北からさまざまな民族が移動・定住し、北部はフルベ族やドウル族などおもにスーダン系の民族、中南部はおもにバンツー系の民族で占められ、現在では約二七〇もの民族の居住が知られている。最南部の熱帯林ではピグミー系のバカ族が知られている。カメルーンが民族文化の十字路であり、アフリカの縮図といわれるゆえんである。

## 物質文化の比較研究

六九年にわたしがカメルーンに向かったとき、のちに民博で同僚となる江口一久氏（故人）が収集団のメンバーとして現地で調査収集に従事していた。彼は北部でフルベ族を中心に調査収集を続け、わたしは中央高地のサバンナに住む雑穀主食の焼畑農耕民のドウル族を調査した。七四年に民博が創設され、わたしたちは開館をめざして西アフリカ各地で民族資料の調査収集にあたった。

そして開館後の七八年からアフリカにおける物質文化の調査研究（代表和田正平）がはじまった。この時期からわたしはカメルーン中央高地の西方へ視線を向け、バメンダ高地の根菜主食の焼畑農耕民の調査に従事したが、この高地の人びとは、規模の大小はさまざまであるものの、高地に特有の水源を中心とした伝統的王制をもつ首長制社会をきざき、現在もカメルーン国家の地方行政区の役割を担いながら、王制社会の伝統を維持している。

## 多様な比較の視座

「アフリカカメルーン民族誌写真集——端信行コレクション」は、わたしが調査のうちに撮影した約六五〇〇点の写真資料を収めたデータベースで、写真データはカラーフィルムで撮影したスライドであった。いま振り返ると、カラースライドは個人で完全に保存・管理するのがなかなか困難であった。上映会や印刷など、必要あるごとにケースから選びだし、終われば元に戻すのだが、初期のスライドの劣化は防げないし、出し入れしているうちに紛失してしまったものもあった。スライドのデジタル化からデータベースの立ちあげまで、けっこう時間がかかったが、この試みの過程ではそれまで気づかなかったさまざまな比較が容易に可能であることに気づかされた。ここではもともとシンプルなふたつの例を紹介してみる。一般的な比較は空間的あるいは地域的比較であろう。主食作物の保存法をとりあげてみる。写真1と写真2はモロコシを主食とするドウル族の穀物倉であり、写真1が内部で写真2は全景である。写真3は北部のトゥジンピエを主食とする山地民の貯蔵棚、写真4はバメンダ高地のヤムイモの貯蔵法である。

もう一例は仮面ダンスの比較だが、装束やダンスにみる進化の時間的変化も追跡できる。写真5は今日では村人の埋葬儀礼で一般的に見られる仮面である。写真6は王宮に伝わる仮面で、面はつけずマカボの葉を頭部にのせており、より伝統的な様式だという。そして写真7は有力なクラン（氏族）の長が先祖から受け継いできた仮面で、原初的な様式を示している。こうした空間的・時間的比較はデータベースから容易に想起できる。そして、そこからあらたな旅がはじまる。



写真7 X0022646、ノース・ウエスト州、マンコン、1984年



写真6 X0022915、ノース・ウエスト州、マンコン、1984年



写真5 X0022762、ノース・ウエスト州、マンコン、1984年



写真4 X0019262、ノース・ウエスト州、マンコン、1979年



写真3 X0075302、ノース州、1997年

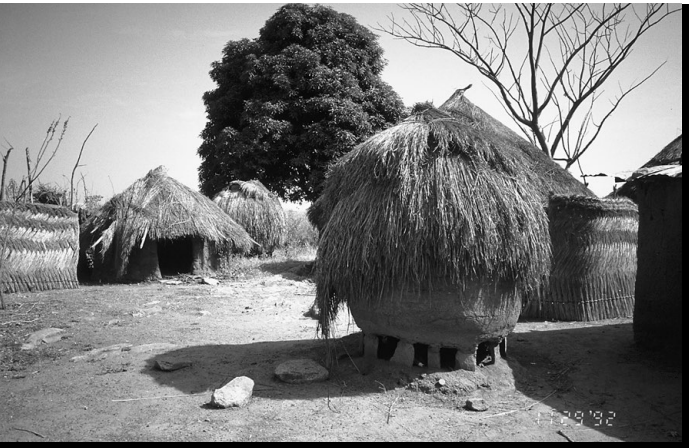


写真2 X0071609、アダマワ州、ンゲセック・ガイ、1992年



写真1 X0018112、アダマワ州、ンゲセック・ガイ、1970年

大学生であった一九八〇年ごろ、わたしは日本の山の暮らしに関心があった。当時、一〇年ほど前の学会で毎回、日本の焼畑について発表する人がいたと聞いた。参加者は皆、どうして消えゆく焼畑の研究に価値があるのかわからなかったという。その発表者は、佐々木高明さん（民博第二代館長）。彼は、日本のみならずインドやネパールの焼畑を調査して、二冊の本を刊行した。『熱帯の焼畑』（一九七〇年）、『日本の焼畑』（一九七二年）である。これらの本の内容は、刊行されて五〇年近く経過するのだが、いまだに精彩を失っていない。

### 焼畑データベース

それもそのはず、当時は日本の焼畑が観察できる最後の時期であった。佐々木さんは、一九六〇年に熊本県五木村を訪れて焼畑の調査をおこなった。そのときに現地で撮影した写真が、二〇一九年五月に民博のホームページにて公開されたデータベースにおさめられている。写真に映る山の斜面には焼畑耕地が広がり、出作り小屋（道具を置いたり、休憩や泊まるための小屋）が点在する。木に登り、そして空中で木を渡り歩いて枝木を伐採する「木渡り」とよばれる方法は、かつて九州山地に広く見られたものだった。そして収穫されたアワやヒエなどの雑穀は、食文化の一部を占めていた。

そもそも焼畑とは、森を伐採し、火入れをした後に四年ほど作物を植える農耕のことである。作物は毎年異なるものを植えるが、四年目の収穫ののち、その耕地は三〇年ほど放置する。畑が森へと戻り、土壌が再生するのを待つという自然に優しい農法である。

わたしは、佐々木さんの撮影した写真を見て、データベースのタイトルを「焼畑の世界——佐々木高明のまなざし」に決めた。いずれの写真も文字情報はまったく付与されていない

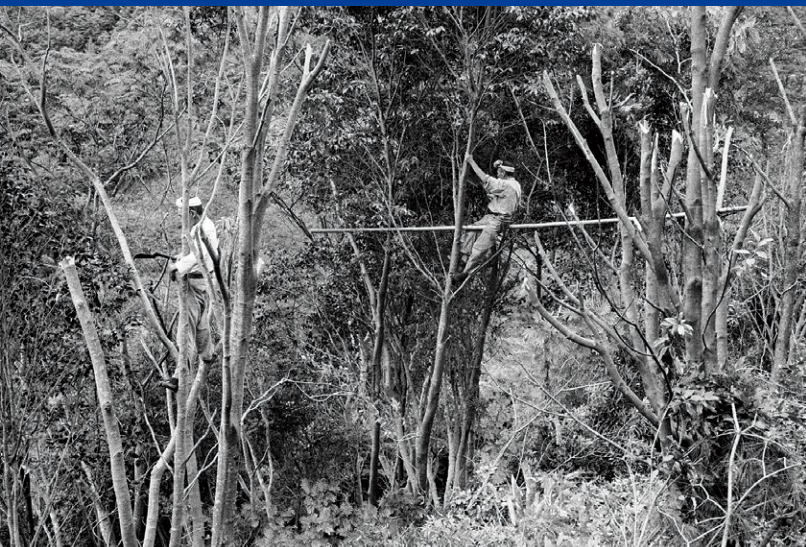
かったが、五木村や沖繩など、地域ごとにはまとめられていた。データベース制作にあたり、わたしは、九州山地の焼畑に詳しい川野和昭さん（南方民俗文化研究所主宰）に連絡をとって、作業の手伝いをお願いした。川野さんは、土壌調査の様子や、タロイモ畑を撮影した佐々木さんの五木村へのまなざしに感激していた。一方わたしは、佐々木さんが研究には使用しなかった写真の方に興味をもった。伐採した木材を運搬するトラックや、焼畑耕地に隣接する水田などからは、当時、村には焼畑以外にも多様ななりわいがあったことがうかがえる。

### 現場で話を聞く

焼畑に関する写真情報をさらに得るために、川野さんと二人で現地に行くことになった。五木村は、球磨川の支流・川辺川の上流部に位置しており、ダム建設予定地であったところだ。現在では、その建設は中止されているが、すでに中心集落は高台に移っていた。佐々木さんは、梶原という集落で調査をしていた。ここは、ダムによる移転は免れており、過疎化は進んでいるものの、当時の雰囲気を残していた。幸いにも、佐々木さんの訪問を記憶している方や当時の焼畑の経験者に会うことができた。写真で撮影された焼畑耕地や出作り小屋の場所、上述した木渡りの際に使用する竿の素材（タケ）、当時木渡りができた人の名前なども聞く

木村の住民にはどのように見られているのでしょうか。文字情報を付与したものの、その内容は正しいのだろうか。そんなことが気になったわたしは、昨年二月、五木村の協力を得て、村の伝統文化伝承会でデータベースの写真を紹介するセミナーをおこなった。会には、約三〇人が集まってくれた。佐々木さんの写真を一枚ずつ見せていくと歓声がわくこともあった。解説が違うという指摘を受けたり、あらたな情報が加わった写真もある。当時の写真を見て涙が出るほど懐かしかったという人もいた。その後、村では独自に当時の情報を集める活動も始まっている。

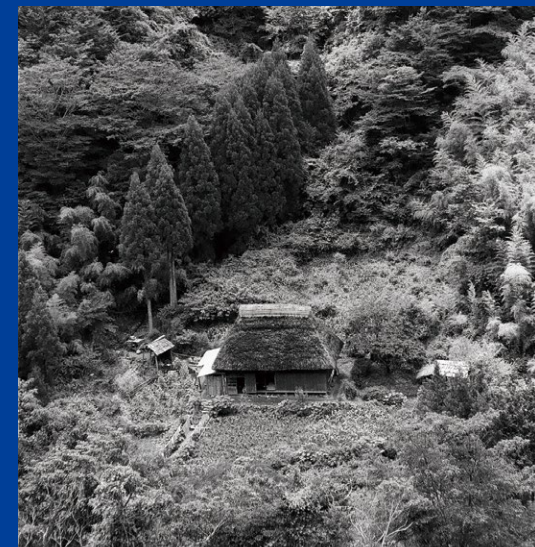
多くの方々に助けられて、このデータベースは作られた。佐々木さんがご存命なら、これを見て何を語るであろうか。新型コロナウイルスの感染の拡大で、現在でも国境がほぼ封鎖されている。食料の多くを海外からの輸入に依存している日本のリスクは大きい。佐々木さんなら、日本の自然と共存しながら食料自給率を高めるなどの、食と農の未来を考えるヒントが焼畑にはあると言うのではないだろうか。



木渡りの様子。木と木のあいだに「キオロシザオ」とよばれる竿を渡し、その上を渡る (X0398568、1960年)



出作り小屋の上の焼畑耕地 (X0398899、1960年)



出作り小屋 (X0398898、1960年)



出作り小屋の現在 (2017年)

ことができた。わたしたちは出作り小屋のあった場所にも行った。現在では林道がとおり、車で容易にアクセスできるが、かつては数キロメートル離れた小屋まで谷間の小道を歩いて登っていたのだ。そこには、改築はされていたものの、佐々木さんの写真に見られるような小屋が健在であった。ちょうど村の人がシイタケの菌をホダ木に打ち込む仕事をしていた。わたしたちは、佐々木さんの写真の世界が村のなかにまだうつつすらと生きていることを感じた。

### 地域への還元を試み

データベースは一般に公開されたものの、五



佐々木さんの写真をめぐる五木村でのセミナー (2019年11月2日)

# 海と生きる人びとの生活と独立期の パプアニューギニア——大島襄二写真コレクション

丹羽典生 民博 学術資源研究開発センター

大島襄二氏は、東アジアの島嶼部から太平洋にかけての漁撈文化に関心を抱き、そうした島嶼世界に暮らす人びとを対象に人文地理学や民族学的視点から調査をおこなった研究者である。おもな調査地は、フィリピンのパラワン島とオーストラリアのトレス海峡になる。一九二〇年に生を受け、旧制五高、京都帝国大学を卒業、第二次世界大戦への応召、病気による長期の療養を経て、戦後は高等学校ついで大学で教鞭をとった。戦争による大きな影響を受けた世代といえようか。

さまざまな学会でも要職を務め、わたしよりおよそ五〇歳年上の方である。わたしが日本オセアニア学会に参加し始めた二〇〇〇年ごろ、大島氏は学会に毎回のように参加し、懇親会では同じく一九二〇年代生まれの石川榮吉氏とならび、つねに学会の重鎮として上座におられた印象がある。国立民族学博物館のデータベース「西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料——大島襄二写真コレクション」は、そうした彼が二〇二二年に本館に寄贈した約一万枚の写真資料から構成されている。

## 地域の広がり

写真資料には、彼が現地調査時に撮影したものとより、学会や私用に訪れたとおぼしき場所の写真も大量に含まれている。したがって、データベースが覆う地域も、アジア（日本、中国、台湾、韓国、フィリピン、インドネシア、マレーシア、タイ、シンガポール）、インド洋周辺（インド、スリランカ、モルディブ、モリシヤス）、オセアニア（オーストラリア、パプアニューギニア、ニュージーランド、ニューカレドニア）、中東（アラブ首長国連邦）、ヨーロッパ（ルウェー）、北米（アメリカ、カナダ）など、広範囲におよぶ。

写真の数は膨大であるものの、やはり大島氏の関心を反映してか水辺での生活を撮影した写真が多く目につく。それ以外にも、晩年に創作を交えたエッセイを刊行することになるカナダ滞在時の写真や、沖縄国際海洋博覧会政府出展館の海洋文化館資料収集調査団のメン

バーとして一九七五年に沖縄で撮影した一連の写真には、彼の果たした役割などを念頭に置いてみるという想像力を掻き立てられる。また一九六〇年代後半に撮影されたフィリピンのパラワン島関係の写真は、比較的撮影者の説明が残されていることもあり、当時の様子を知ることができるの見どころのひとつとなっている。

## 海と島の風景とパプアニューギニア独立

わたしの関心から紹介したいのは、オセアニア関係の写真である。大島氏自身の研究上の関心も深く、オーストラリアだけで二七四二枚（そのうちトレス海峡が含まれるクインズランド州のものが一〇七五枚）、そのオーストラリアに一九七五年まで委任統治されていたパプアニューギニアの写真は九一四枚にもなる。

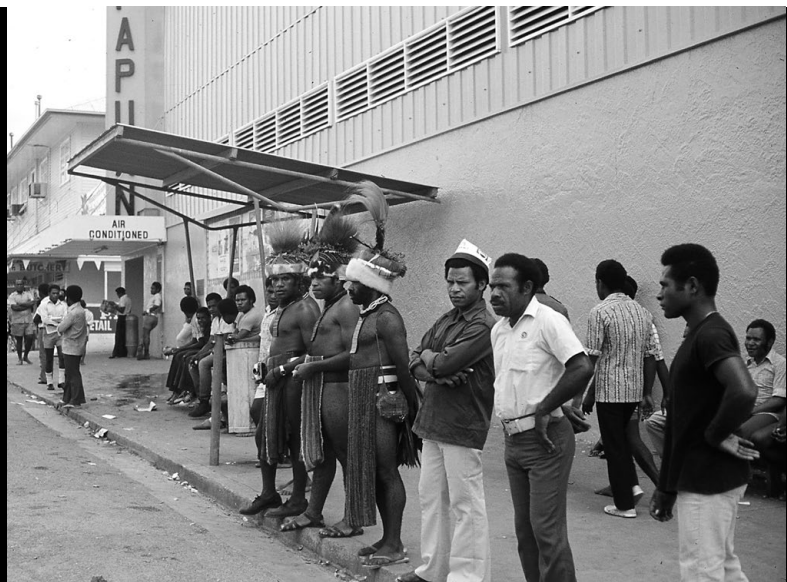
トレス海峡の写真のなかには、木曜島関連の写真も含まれている。木曜島は戦前に真珠の採集が盛んであった地域であり、日本人が潜水夫として集住地区を形成していたことでも知られている。大島襄二写真コレクションには、トレス海峡に住む先住民の漁撈文化に関する興味深い写真だけでなく、日本人の墓地の写真も含まれている。

パプアニューギニアにおいては、独立前後の各地の姿を写真に収めている。なかでも紹介したいのは、一九七六年の独立記念日に撮影された写真である。同国の独立は、一九七五年九月一日。一年前に独立を果たしたばかりで、国民の多くにとつて独立記念祭は新鮮だったのではないだろうか。街中のバス停で、盛装をして記念祭に備える人びとの姿がとらえられている。

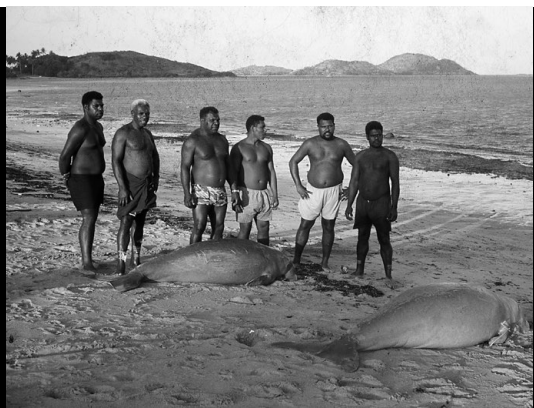
大島氏は、パプアニューギニアの文化として有名な仮面や身体装飾にも目を引かれたのだろう。なかには研究のあいまだろうか、大学の庭で、身なりを整えたパプアニューギニアの人とともに写った写真も残されている。これは先の写真とは逆に、くしくも独立二年前のものである。大島襄二写真コレクションには、このように魅力的な写真が数多く含まれている。しかし撮影地域の詳細が不明な写真も多く、撮影の目的や意図、書籍や論文での使用歴の有無など、情報としてまだまだ不明確な箇所は多い。大島氏の詳細な年譜もなく、年代ごとの検索もできないので、大島氏の生涯と研究歴に沿った写真の精査も難しい。その意味では、データベースはまだまだ向上の余地がある。何より保存状態の問題か、不鮮明な画像が多いのも残念だ。しかし、探求心をもって挑めばさまざまな知見をもたらしてくれる宝の山である。わたしは今、時間を見つけてデータベースを深く探索することを夢見ている。同好の士はおられぬだろうか。



パプアニューギニア大学にて。右から2人目が大島襄二氏 (X0327713、パプアニューギニア、ポートモレスビー、1974年)



ポートモレスビー市内のバス停。独立記念式典の日 (X0328623、パプアニューギニア、1976年)



ジュゴンをとらえた漁民 (X0328000、オーストラリア、クインズランド州マビオグ島、1976年)



トロブリアンド諸島から来た伝統的大型カヌー「ラカトイ」 (X0328636、パプアニューギニア、ポートモレスビー、1976年)

# スマホが激変させた 地域文化

内戦下の南スーダンを二〇一二年に訪れたときのこと。電気も通じていない藁葺きの家々がサバンの一軒屋で、ホンダの小型蓄電機が稼働し、おびただしい数の携帯電話が繋がれ充電されている光景に出会い、目を見張った。通信網を確保するアンテナが何十キロメートルおきかに設置されていて、電波が届くその周辺でのみかろうじて通話が可能というひどい通信状況にもかかわらず、しかも現金収入など皆無に近いはずの極貧の村人たちのあいだに、携帯電話がこれほどにも普及していることに驚愕したことがあった。

先進国であれ途上国であれ、携帯電話によって世界が一変したことは言うまでもないが、そもそも電話など触ったこともなく、通信という発想すらなかったであろう、最辺境の住人に与えた携帯電話のインパクトは想像を絶するものがある。

約半世紀にわたって、地球上の辺境に息づく地域文化を撮影してきた。見知らぬ民族文化に刺激されシャッターを切ってきたが、近年になり何処に行ってもほぼ観てしまった光景であると感じるようになり、とくにこの一〇年ほど、その傾向が

## 野町 和嘉

プロフィール  
1946年高知県生まれ。写真家。杵島隆に師事した後、1971年にフリー。サハラ砂漠、ナイル川流域、エチオピア、チベット、サウジアラビア等での長期の取材を続ける。写真集に『サハラ』（平凡社）、『ナイル』（情報センター出版局）、『メッカ巡礼』（集英社）ほか。ローマ、ミラノ、東京ほかで大規模な写真展「聖地巡礼」を開催。土門拳賞、芸術選奨文部大臣新人賞、日本写真協会国際賞など受賞。2009年、紫綬褒章を受章。

顕著になった。無理もない、スマホの普及によって世界中でほぼ同一の情報共有ようになってしまったわけであるから。情報の質や深さに違いはあるにしても、その思考パターンの回路に大差は無くなってしまったのである。

標高四〇〇〇メートルの極限高地に二万人近い僧尼が暮らす、東チベットのラルンガル僧院を二〇一四年に訪れた折にも、僧尼の間にスマートフォンがものすごい勢いで普及している様に、チベットよ、お前もかと溜め息をついたことがあった。こちらはIT大国中国の領域であるから南スーダンとは比較にならない。僧院ではテレビの持ち込みは以前から禁じられていたが、スマホは規制がなかった。尼さんとチャットに熱中している僧もいると聞いた。スマートフォンに熱中している僧もいると聞いた。スマートフォンに熱中している僧もいると聞いた。スマートフォンに熱中している僧もいると聞いた。

思えば、最後のよき時代に地域文化の原形にかろうじて触れることができた、しみじみ感じるのである。

## 月刊 みんな

7月号目次

- |  |  |
|--|--|
| <p>1 エッセイ 千字文<br/>スマホが激変させた地域文化<br/>野町 和嘉</p> <p>2 特集 拡がる写真データベース<br/>写真データベースの学術的価値<br/>飯田 卓</p> <p>4 データベースが生み出す多様な視座<br/>——「アフリカ カメルーン民族誌写真集」の試みから<br/>端 信行</p> <p>6 食と農の未来<br/>——佐々木高明の見た最後の焼畑<br/>池谷 和信</p> <p>8 海と生きる人びとの生活と独立期のバブアニューギニア<br/>——大島襄二写真コレクション<br/>丹羽 典生</p> <p>10 ○○してみました世界のフィールド<br/>異文化の音楽をまなぶ<br/>福岡 正太</p> | <p>12 みんなく Information</p> <p>14 世界のバスケットリー×バスケットリーの世界<br/>籠をあまり使わない社会<br/>金谷 美和</p> <p>16 みんなく回遊<br/>展示場で散歩する<br/>今村 宏之</p> <p>18 シネ倶楽部 M<br/>チベットのリアル<br/>——「巡礼の約束」<br/>棚瀬 慈郎</p> <p>20 ことばの迷い道<br/>外国人は目が白い？<br/>古川 不可知</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|--|--|

# 異文化の音楽をまなぶ

福岡 正太  
民博 人類基礎理論研究部



スダ人の音楽家に  
弟子入りしてみました  
西ジャワで楽器をならったのは30年も前のこと。練習をさぼってすっかり腕がさびついてしまいました

世界には多様な音楽があり、その音のとらえ方も、強弱であらわしたり、大小で示したりなどさまざま。異文化の音楽をまなぶことは、他者を知ることでもある。インドネシアの西ジャワで伝統楽器を教わった筆者が、その師弟関係からまなんだこととは……。



中部ジャワのガムラン (1995年)

「音楽は聴けばわかる」。世界の多様な音楽に出会う前、わたしはそう考えていたように思う。

しかし、大学でインドネシア、ジャワ島中部の音楽ガムランの演奏をまなび、その考えは大きく変わった。簡単そうに聞こえる曲でも、いざ演奏しようとするとなかなか。どこが始めでどこが終わりなのか、どうやってリズムを合わせているのか、ジャワから来日した先生に繰り返し教えてもらって、やっと少しずつ音楽の流れにのれるようになった。

大小さまざまなゴングなど、金属の打楽器を多く使うガムランは、圧倒的な存在感と独特の響きをもっている。見たり聴いたりするだけでも、エキゾチックな魅力でわたしたちを惹きつける。しかし実際に演奏をならべてみると、聴きどころもよくわからずあいまいに響くだけだった音楽が、明瞭な形をとって聞こえてくるようになった。予想外の音楽のしぐみが発見し、どんどん新しい世界が開けてくるようになって楽しかった。

## 上下、大小

その後、わたしは西ジャワのスダ人の音楽に興味をもち、現地を訪れるようになった。そして、いくつかの楽器をならいながら、スダ音楽への理解を深めていった。

わたしがならった楽器のひとつにルバップがある。ルバップは、弦を弓でこすって演奏する胡弓やヴァイオリンの仲間である。西ジャワの音楽においては、歌をささえ導く重要な楽器であり、歌をともなわない音楽

インドネシア  
西ジャワ



でも、国営ラジオの放送でも、彼の演奏を聴くことができた。その人の弟子だと言えば、それだけで一目おかれるような人だった。わたしが先生をとおしてまなんだのは演奏ばかりではない。

わたしがルバップをならうことが決まると、先生はまず、腕の良いルバップ職人の工房にわたしを連れて行き、良い楽器を選んでくれた。先生は職人と話し込み、しばらくしてニコニコしながら出てきた。「紹介料をもらったよ」。西ジャワの伝統的な楽器は、顔の見える人間関係のなかで流通する。紹介料は、そうした関係をつないでいるもののひとつであるようだ。

あるとき、日本の食材を手に入れて、煮込みうどんのようなものを食べようとしているところに先生がふらっとやってきた。「一緒にお昼ご飯でも食べるつもりだったのさ。だが器のなかをのぞき込むと、おもむろに言った。「わたしはお腹がいっぱいだ」。あまりおいしそうに見えなかったのかもしれない。

先生にとっても、わたしに教えることは異文化との出会いだったに違いない。わたしが何か質問するたびに、当惑して考え込んでいるようだった。あちらはあちらで、わざわざ日本からスダ音楽をまなびにきた外国人をとおして、異文化を知る過程を楽しんでいた節もある。

帰国するとき、先生はお手製の弓をプレゼントしてくれた。その弓は、異文化の音楽は聴くだけではわからない、人との関係を築くことによって理解を深めていくものだと教えてくれていた気がする。

プレゼントされた弓。先生の名前がS.Sutisnaと刻まれている

楽では、しばしばルバップが華麗なメロディをかなでる。ある日のレッスンで、先生から「そこはもつと下」と声をかけられた。わたしが音を下げると、さらに言う。「そうじゃない、下だ」。先生は、弦を押さえる指のポジションを下にさげると言ったのだった。わたしは、五線譜であらわすように、音の動きをそのまま上下のイメージでとらえていたが、先生はルバップを演奏するときの手の運動感覚でとらえていたのさ。音を高くするのは指のポジションを下げることで、低くするのは上げることだ。

## 師弟関係

わたしにルバップを教えてくれたのは、スダ音楽の愛好家にはよく知られた人だった。当時広く流通していたスダ音楽のカセットテープ



西ジャワのルバップ。演奏しているのはご近所に住んでいた音楽家マンさん (1995年)





# 世界の バスケットリー × バスケットリーの 世界

## 籠をあまり使わない社会

かねたみわ 金谷 美和 国際ファッション専門職大学准教授

籠が日常的に使われている社会がある一方、ほとんど使われていない地域も存在する。籠が一般的でない社会とはどういうところなのか。その生活をのぞいてみると、その地域の環境、そして籠が本来もっている特性があらためて浮かび上がってくる。

籠は、ものを入れたり、運搬したりするのに使われる。日本のわたしたちの暮らしで、籠が使われることは少なくなったが、それでも籠を使っている場面を思い浮かべることができるだろう。洗濯籠、屑籠、自転車籠、鳥籠、買い物籠……。

しかし、籠がほとんど使われない地域もある。籠の代わりに何にもものを入れ、どのように運んでいるのだろうか。わたしの調査地であるインド西部グジャラート州カッチ地方は、まさに籠のあまり使われない地域である。

### 布を用いて運ぶ

では、カッチ地方では、ものを入れること、ものを運ぶことは、どのようにおこなわれているのだろうか。この地方には、布が多用される文化がある。一枚布にものを包んで運搬する風呂敷や、布を袋状に仕立てて、そのなかにもものを入れて運搬する布袋がある。風呂敷も布袋も日常生活のな

かで頻繁に用いられている。往来では、風呂敷包みを頭に載せて歩いていく女性に行きあう。家のなかでは、服を風呂敷に包んで、それを戸棚のなかにしまっているのを見る。布は収納にも使われるのである。男性たちは、肩に大判の布をかけて歩いている。布は染柄が入っていたり、刺繍がほどこされていたりして、とてもおしゃれである。肩にかけているときは服飾の一部だが、市場で買い物をして荷物が増えると、風呂敷にして運搬具にもする。家畜の背中に荷物を載せて運ぶときには、やはり布でできた振り分け袋が使われる。

### 市場で籠を探す

では、籠はまったくないのであるか。市場に行くと、籠を探してみた。すると、籠はあったものの、その用途は非常に限られていた。まず、目に留まったのは花籠である。ヒンドゥー教徒は、祭壇に新鮮な花を供えるのを日課にしている人が多い。彼

### 籠があたり前でない社会

籠を作っているのは、外からやって来る移動民である。材料のタケは、カッチ地方から直線距離で約二〇〇キロメートルも離れているアッサム地方から運ばれてくる。アッサム地方は、温暖多雨気候で、タケが生育しやすく、また籠をはじめとして日常生活のなかでタケがさかんに利用されている。カッチ地方では、材料のタケも作り手も外からやってきたものであった。



材木の卸商はアッサム地方からタケを仕入れている (インド、カッチ地方、2020年)

しなかつたといえるだろう。籠を多用するアッサム地方では、竹籠は漁具としても多用されていた。カッチ地方は河川や池での漁業が盛んではない。それは、乾燥地であるという自然環境的な制約とともに、もしかしたら籠がないからできない、ということもあるかもしれない。

籠の運搬具としての特性は、壊れやすいもの、傷つきやすいものを運ぶことができるということである。布では運ぶことのできないものを運ぶために、わざわざ籠を使っているといえる。牧畜民が移動中に新生児を竹籠に入れて運んでいるのを見たことがある。新生児は首がすわっていないために、抱きかかえて長距離を運ぶことはできない。そこで竹籠が使われていたのだろう。新生児は布で包まれ、籠の上から布を何枚も重ねて大事に運ばれていた。

なぜ籠がないのかと考えると、逆に、籠の特性が浮かび上がるのである。



上：花売りの竹籠。プラスチックの籠や発泡スチロールの箱と併用している (インド、カッチ地方、2020年)  
左：牧畜民が新生児を入れて運ぶ、フンドとよばれる竹籠 (インド、カッチ地方、2004年)



籠を作るためには、編み材が必要である。編み材として不可欠な特性は、軽くて強度があり、曲げても折れない弾力性があることである。タケはその特性を満たしている。カッチ地方では、このような特性を満たした植物が得られないために、籠が発達

## 展示場で散歩する

総合研究大学院大学博士後期課程 今村 宏之 いまむら ひろゆき

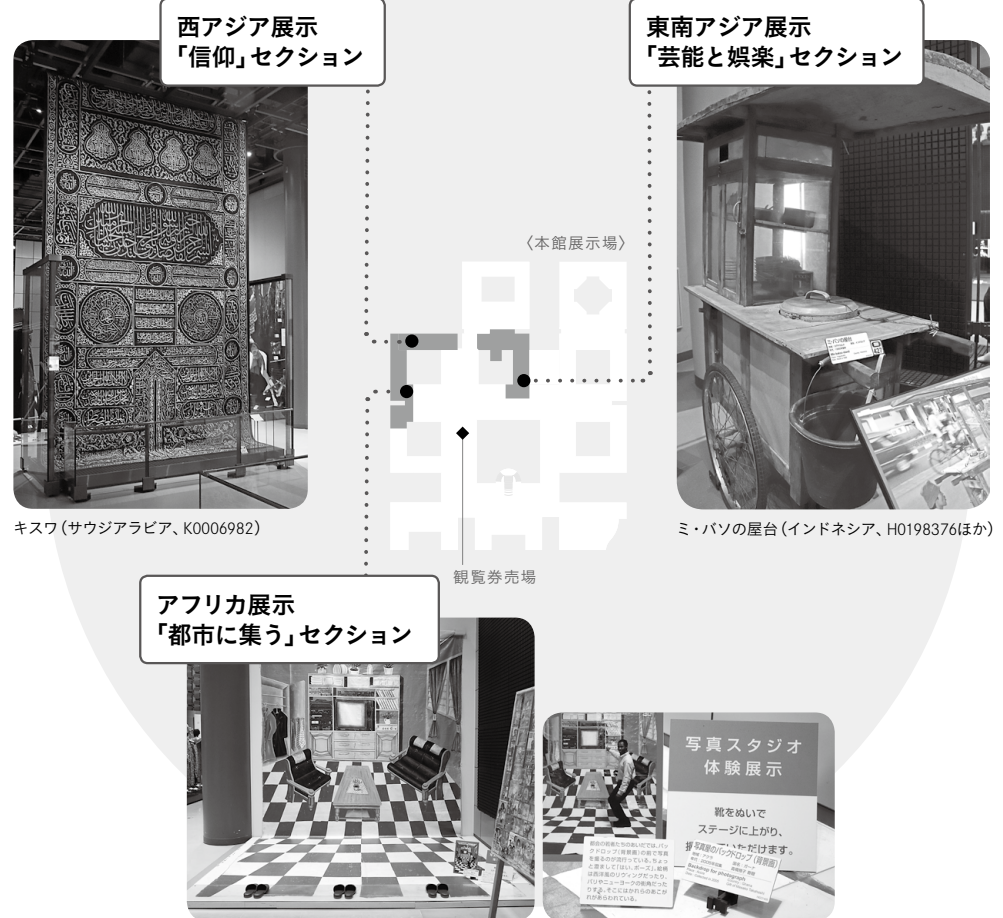


ワヤン・ゴレックは東南アジアのアベンジャーズ？ (H0229667ほか)

だが、それでは数千年にわたって語り継がれ、地域を越えて伝播してきたという口マンが削がれてしまう。民族文化を普遍化して理解しようとするには無理がある。

品で統一されているという。よく見るとテレビもフィリップスだ。ガーナの都市生活民にとってあこがれのブランドだったのかもしれない。

東南アジア展示「芸能と娯楽」セクションの大画面は、東南アジア各国の伝統芸能の映像を流し続けている。スクリーンの下には、インドの叙事詩「マハーバータ」や「ラーマヤナ」をモチーフとするインドネシアの人形芝居用の操り人形、ワヤン・ゴレックが勢ぞろいしている。「善と悪のグループがあって、それが大戦争をする神話的な叙事詩が元ネタで……」と説明し終わらないうちに、映画音楽家の友人は「ああ、東南アジアのアベンジャーズね」といつて写真を撮り始めた。インドの勸善懲惡譚をハリウッドのアクション映画に例えたところはなるほどと思ったのだが、それでは数千年にわたって語り継がれ、地域を越えて伝播してきたという口マンが削がれてしまう。民族文化を普遍化して理解しようとするには無理がある。

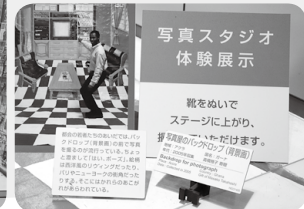
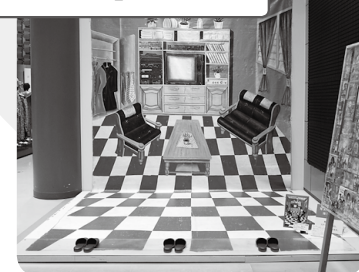


キスワ (サウジアラビア、K0006982)

ミ・パソの屋台 (インドネシア、H0198376ほか)

観覧券売場

アフリカ展示「都市に集う」セクション



写真屋のバックドロップ(背景画) (ガーナ、H0231455)

### インドネシア人ムスリムの友人と回る

わたしはインドネシアの地域研究をしているため、来日するインドネシア人ムスリムの友人に大阪案内を頼まれることがある。みんぱくまで足を運んでくれる人もいる。

彼らは一様に、西アジア展示に来るとびっくりする。イスラームの聖地メッカのカアバ神殿に掛けられる黒幕(キスワ)が出迎えてくれるからだ。どういう経緯で入手したものなのか質問攻めにしながら、わたしにスマホを手渡してくる。キスワの前で記念撮影をするためだ。そして、すぐさまSNSに「いつの日か必ずメッカに聖地巡礼に行くんだ」とコメントをつけて投稿する。どんな信仰生活を送っている人でも、キスワの前で記念撮影をするときは改まった表情になる。ちなみに、このキスワは一九七〇年の大阪万博の際にサウジアラビア政府から寄贈されたものだ。東南アジア展示場にはカキ・リマとよばれるインドネシアの手押し式屋台が展示されている。インドネシア語でカキは足でリマは数字の五を意味し、直訳すれば五本足だ。ふたつの車輪と停車時の支えになる一本の脚部、そして屋台を押し売り歩く行商人の二本の足を合わせて五つの脚に見立てている。展示場のカキ・リマは実際に肉団子入りの汁そば(ミ・パソ)売りが使用していたものだという。インドネシアで飲食業を営む友人は、この屋台が本場に実用されていたのか並々

文化人類学や地域研究を専攻するわたしのような学生にとって、みんぱくの展示場は最良の散歩道のひとつだ。展示場をぐるりと一周するだけで、自分の研究地域・テーマ以外にも目を向けるきっかけになる。

しかし、それ以上におすすめるたいのは、友人と展示場を回ることだ。一人散歩では気づけないみんぱくの楽しみ方に、ハッとさせられるからだ。

### 音楽マニア、映画音楽家の友人と回る

アフリカ展示場には、ガーナの若者のあいだで流行していたという写真スタジオ体験展示がある。大型テレビやリビングテーブル、ソファが描かれた背景画の前でポーズをきめて写真を撮るらしい。音楽マニアの友人はオーディオ・セットを見て「へえ」と声をあげた。イコライザーなどの音響機器がオランダの電気機器メーカー・フィリップス社の製



背景画の音響設備には「フィリップス社」の印字が (H0231455)

らぬ興味をもったようだ。屋台に据え付けられているアルミ製の鍋の蓋を開け、顔を突っ込み、匂いをかぎはじめた。鶏の出汁の香りが残っているという。たしかに、ほんのりと鶏ガラスープの香りがする。

### 展示場にたどり着けない

友人をみんぱくに誘っても、展示場までたどり着けないことがある。万博記念公園の正面口で太陽の塔に見入ってしまい、満足してしまう人が一定数いる。

あるいは、ひとつひとつの資料から浮かび上がってくる庶民の姿や暮らしぶりを想像し、具合が悪くなってしまった人もいる。標本資料は実生活で使用されていたものも少なくないからか、ふつうの人でもモノに込められた念のようなものを感じとってしまうのかもしれない。その人は、ものの五分で展示場から引き上げ、隣の大阪日本民芸館に入ってしまった。悔しいけれど、楽しみ方は人それぞれだ。

ぶらぶらするたびに、なにか発見がある。順路は五キロメートルと散歩にちょうどよい。友人と歩くと、その人のあらたな一面を知りさっかけにもなる。本記事が掲載されるころには、展示場が再開されて、また誰かと散策できることを願っている。



チベットのリアル

チベット映画

「チベット映画」というジャンルがもしあるとすれば、これまでは、ジャンルジャック・アノーの「セブン・イヤーズ・イン・チベット」やマーティン・スコセッシの「クンドウン」、ベルナルド・ベルトルッチの「リトルブッド」のように、チベットを舞台とし、チベット社会を一種のシャングリラとして描く西側の映画のことであった。そこでは当然中国は、このシャングリラを蹂躪し、征服した悪者として描かれてきた。

その中国では一九八〇年代に入って改革開放路線が定着し、経済のみならず文化の点でも一種の開放政策がとられることとなった。そのなかで、トンドゥブジャをパイオニアとする、チベット語によって作品を書く現代文学作家が輩出し、また映画についても、ペマ・ツェテン、ソントルジャといった、チベット人監督が生まれてくることとなった。彼らは人間の複雑な心理や内面の声を表現する、現代的なメディアとしての映像表現を試みてきた。

ソントルジャは「テイメー・クンデンを探して」や「オールド・ドッグ」といった秀作で日本でも知られているペマ・ツェテンの友人でもあり、自身撮影スタッフとして彼の作品に協力してきた。彼らを、いわばチベット「国民映画」の第一世代とよぶこともできよう。

しかし、同時に彼ら二人がともに、北京電影学院という現代中国の教育機関で学んでおり、その作品もまた、漢民族の優れた映画人たちの協力のうえで完成していることを注意すべきである。

「巡礼の約束」

この映画は、二〇一一年の「陽に灼けた道」、二〇一五年の「草原の河」に続くソントルジャ監督の三作目にあたる。前二作は国際的に高い評価を受け、多くの映画賞を受賞した。

本作も前作と同じく、映画の中心的なテーマは家族のあいだの心理的な葛藤のプロセスを描くことにある。特に本作では、ラサへの巡礼のなかで、一人の亡くなった女性への愛を抱えて生きる二人の男（一人は女性の息子、もう一人は女性の再婚相手）の緊迫した関係が描かれる。詳しい筋を書くことは控えておくが、この映画でもストーリーの背景を示すような説明的な描写が



青海チベット牧民のテント (2019年)

棚瀬 慈郎  
滋賀県立大学教授

「巡礼の約束」

原題：阿拉姜色

2018年／中国／ニャロン語、チベット語、中国語／109分

監督：ソントルジャ

出演：ヨンジャンジャ、ニマソンソン、スィチョクジャ、ジンバほか

上：風に舞うルンタとタルチョ (2016年)  
下：甘肅ラプラン僧院のマニ車の並ぶ回廊 (2019年)



殆ど省かれ、ロード・ムービーの形をとりながらも旅の結末が描かれないなど、ペマ・ツェテンの映画とも共通するミニマルな表現が試みられている。

こういったチベット映画第一世代の監督たちの選ぶテーマや作風については、イランのアッバス・キアロスタミや中国の孫張、台湾の侯孝賢といった現代アジアの監督たちとの共通性が指摘されることも多い。その意味では、ソントルジャやペマ・ツェテンの映画は、チベットを舞台とするチベット人監督による作品ではあるものの、決してローカルな映画ではない。同時代の世界の映画の思潮を彼らなりに理解し、再解釈して作られた作品なのである。

巡礼について

この映画の主要部分は、五体投地で礼拝しながらラサへ巡礼する場面である。この、ラサへの五体投地による巡礼は、張楊の映画「ラサへの歩き方」でも取り上げられている。しかし、東チベットからラサへの巡礼が、このような個人的な行為としておこなわれるようになったのは、じつは、ごく最近のことである。

二〇〇七年に中国青海省で出版された、ナクツァン・ヌロという人物の自伝的小説である『ナクツァン少年の喜びと悲しみ』という本のなかでは、彼の子ども時代であった一九五〇年代の東チベットからの巡礼について詳しく書かれている。それによればラサへの巡礼はコミュニティ全体の行事であり、首長の配下、数十軒の家が馬とヤクによるキャラバンを組み、武装した男たちがそれを守るといった形をとっていた。道中には他の部族からの略奪や、狼の襲撃といった危険性が伴い、北部平原で吹雪に遭ってキャラバンが全滅することもあった。何よりも無住の荒野を進むためには、その土地を良く知る道案内が必要であった。つまり、この映画で描かれるような形の巡礼は、中国によって、車のおおることができる幹線道路がラサとのあいだに建設されて初めて可能となったのである。

この映画のなかには、西側の監督たちによる作品のような、中国への直接的な批判はない。しかし中国国内で生きるチベット人たちが、中国社会に対しても複雑でニュアンスに富んだ関係を読むことができるのである。

# ことばの迷い道

## 外国人は目が白い？

ふるかわ ぶかち  
古川 不可知  
九州大学大学院講師

ネパールの東部、エベレストのすぐ南にあたるソルクンブ郡クンブ地方には、シエルパとよばれる人びとが居住している。チベット語の方言であるシエルパ語を母語とする人びとであり、ヒマラヤ登山の手助けをして働くことでも有名である。シエルパたちの住むクンブ地方は、トレッキングや登山の名所として知られており、現在では年間数万人もの外国人観光客がこの山岳地帯を訪れている。トレッキングの途上でシエルパの村を訪れたとき、彼らの会話に注意深く耳を澄ませてみると、「ミカル」が来たと話していることに気づくだろう。ミカルとは外国人もしくは「ガイジン」に近いニュアンスをもつシエルパ語であり、文字どおりに「目（ミク）が白い（カル）」という意味になる。なぜ外国人をミカルとよぶのかと尋ねれば、「西洋人は瞳の色が白いだろう」と教えてくれる。

一般にシエルパの人びとは中肉中背で瞳は黒く、典型的な日本人とよく似た身体的特徴をもっている。そこでわたしが日本人もミカルなのかと聞くと、たいいてい場合は少し考えたあとで、「日本人もミカルだよ」と答えが来る。シエルパ語で識別される他者のカテゴリーは、ロンバ（高カーストのヒンドゥー教徒）、ドンブ（周辺諸民族）、ペバ（チベット人）といった身近な集団についてのものであり、それ以外の外部者はみな一律にミカルとして分類されるのである。

シエルパたちの住むクンブ地方は、周囲から隔絶されたヒマラヤの険しい山岳地帯であり、周辺

地域に住むチベット人やネパール人を除けば、近年に至るまで外部の人びとの往来はほとんどなかった。そのクンブ地方に初めて西洋人が足を踏み入れたのは、一九五〇年代のことである。当初は登山隊がほとんどだったが、一九六〇年代になると山歩きを目的とするトレッキング客も少しずつこの地域を訪れるようになった。一九九〇年代に入るところには、クンブ地方は急速な観光化を果たし、現在は世界のあらゆる地域から観光客がやって来て山道を歩いてゆく。

チベット語やネパールの諸言語に「ミカル」に類する表現があるのかどうか、わたしは寡聞にして知らない。とはいえ、険しい山間部に突如としてあらわれた「目の白い」人びとの姿を目にしたシエルパたちの驚きは容易に想像できる。そのうえ奇矯ききょうにも彼らは、わざわざ大金を払って山村を巡り、危険を冒してまで高い山に登りたがるのである。そうした驚きは、自分たちとは異なる目の色に象徴されたのだろう。

現在この地域に住むシエルパの人びとは、観光に大きく依存した暮らしを送るようになった。多くの民家がロッジやレストランに改装され、シーズンが来ると男性たちはガイドやポーターとして働きに出かける。シエルパたちは、年を追うごとに増え続ける瞳の色もさまざま「ミカル」たちをありがたがると同時に、今も不思議そうな目で見つめているのである。

## 編集後記

新しい生活様式の模索が続くなか、読者の皆さまはいかがお過ごしだろう。東京のラッシュアワーを知る海外の友人に、公共交通を停めない緊急事態宣言など無意味だろうといわれていた。だが、不要不急の外出自粛や休業の要請だけで爆発的な感染は抑えられている。ハグをしない習慣や室内で靴を脱ぐ生活、果ては民度の違い(!!)まで、その社会的要因が取り沙汰されているが、同調圧力の強さはあまり耳にしない。要請に背いてはじめて体感する圧力で、構造的に巷間に伝わりづらいからだろうか。

特集では、再開しても全サービスを提供できない民博をご自宅で利用してもらおう一助として、民博がウェブ上で公開している写真データベースを紹介した。情報を伴う過去の写真はそれ自体貴重だが、さまざまに使われることで価値が高まる。わたしがかわるネパール写真データベースでは、被写体になった方の孫から連絡があり、写真提供とバイラヴ仮面舞踏の映像取材に結びついた。また、ポカラ市の古写真を展示するギャラリーに、民博が80点の写真を正式に貸し出すことにつながった。民博は所蔵資料を作ったり使ったりしてきた当事者集団などと対話する関係を築く、フォーラム型の情報ミュージアムを目指す。写真データベースはその1チャンネルになりつつある。(南真木人)

- 表紙：木渡り。樹木の枝を伐採するために樹木間を移動する  
〔「焼畑の世界——佐々木高明のまなざし」X0002649、熊本県五木村、1960年〕

## 次号の予告

特集

## 「ヒトと感染症」(仮)

## みんぱくをもっと楽しみたい方のために 国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。

毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

### 維持会員・正会員

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

### ミュージアム会員

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もございます。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。  
(電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00)



## 月刊みんぱく 2020年7月号

第44巻第7号通巻第514号 2020年7月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子  
編集委員 南真木人(編集長) 上羽陽子 齋藤晃  
菅瀬晶子 三島禎子 吉岡乾

デザイン 宮谷一 款 長岡綾子  
制作・協力 一般財団法人千里文化財団  
印刷 株式会社遊文舎

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。  
\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

### 交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りにください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてできます。

みんぱくホームページ

みんぱくフェイスブック  
みんぱくツイッター  
みんぱくインスタグラム  
みんぱくYouTube

<https://www.minpaku.ac.jp/>

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official>

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>

